

国際農業者交流協会の海外農業研修その3

——デンマークでの酪農研修 JA道東あさひ代表理事組合長 原井松純氏——

主任研究員 室屋有宏

1 はじめに

JA道東あさひ(本所「野付郡別海町」)は、日本を代表する酪農地帯「根釧地域」にあり、年間の生乳生産量38万トン単協として日本最大であり、北海道全体のおよそ1割のシェアを占める。

同JAの原井組合長は、国際農業者交流協会の前身にあたる国際農友会の派遣研修生として、昭和43年から1年半、日本が酪農経営の目標としてきたデンマークで農業研修を経験された。同地での研修体験と日本の酪農経営、農業教育等への示唆について伺った内容を以下で紹介したい。

2 根釧開拓酪農の厳しさ

原井組合長は富山県の子農家に生まれたが、昭和31年、ご家族と一緒に道東に入植された。北海道の農業開拓は条件の良い所から始まっており、道内でも最も寒冷で土が凍結する根釧地域は「北海道開拓の最後の地」といえる場所であった。入植当時は電気さえなく、未開原野を馬で開墾するという大変厳しい環境であったという。畑作が困難な根釧地域を、酪農専業で自立、発展させることが、開拓農民の願いであり、日本の酪農政策の柱のひとつでもあった。

原井組合長も農作業は手作業がほとんどで、なかなか酪農の未来に夢が描けなかった当時、「酪農王国デンマーク」に行ってみようという思いを持つようになり、19歳のとき研修に参加した。

3 生活を優先させるデンマーク酪農

デンマークでは2か所の農場で半年間ずつ研修を行った。最初は30頭ほどの小規模な農場で、次は60頭程度飼養する大きめの農場で

あった。当時、既に自走式ハーベスター、パイプライン・ミルクカーなど機械化が浸透しており、「自分たちは40～50年位遅れている」と強い衝撃を受けたという。

研修のスタイルは、30頭程度の飼養をすべて一人に任せる方式だった。朝は4時には仕事に就き、午前中は30分間の休憩を除いて猛烈に働く。一方、午後は0～3時まで休み、6時には仕事を終え、日曜日にも交代で休む仕組みが確立していた。日本と異なり、デンマークでは生活と仕事を明確に分け、生活を優先する姿勢がはっきりしており日本人も見習うべきと思った。

また、デンマークの酪農に「ゆとり」があるのは、単に機械化や経営規模の違いによるものではないとの印象を持ったという。例えば、酪農のインフラ蓄積が進んでおり、100年経たような古い牛舎が普通に使用されており、機械類も修理を前提に長期間利用する。そもそも機械の設計思想が汎用性を重視しており、デンマークは投資効率が高いと感じた。

4 農業経営者を育てる仕組み

デンマーク酪農は、実務と学習が絶えず連動し、農業経営者を育てていくソフトの仕組みも非常に優れているという。

デンマークでは、農場は親子間でも子弟は親から農場を時価で購入しなければならない(税法上、農場を相続する際の相続税が高く、相続は実質上困難)。さらに農場取得のためには、農業専門教育を受け、一定の資格取得が義務づけられている。

そのため酪農経営を志す人は、他農場での研修を通じ自己資本を蓄積するとともに農業技術・農場経営能力等のスキルを獲得する。これに加えて農業専門教育を受けることで、

酪農経営者として階梯^{かいてい}を上っていく制度が出来ている。原井組合長自身、農業研修後の半年間、現地の農学校で学んだ経験があり、農業をしながら実践的なことを学んでいくデンマークの方法が一番良いと評価する。

5 輸入飼料依存のリスク

原井組合長が昭和45年に日本に帰国して数年後、根釧地域では酪農経営の機械化・大規模化を推進する国家プロジェクトが始まり、現在では経営規模や技術の面では、欧州と変わらない水準となっている。

しかし、日本が飼料を全面的に輸入に依存しつつ酪農を拡大してきたのに対し、ヨーロッパは国家が食料確保に責任を持ち、飼料穀物も自給するなど根本的な枠組みが異なると原井組合長は指摘する。

近年の飼料価格高騰等により日本の酪農経営は所得率が下落しており、同JA管内の酪農経営では一層の大型化と長時間労働によって経営維持を図る動きが強まっている。他方、こうした対応が難しい「都府県の酪農業の衰退が特に進んでおり、今後輸入が増加する恐れがある」。

現状も国内生乳生産の減少に歯止めがかかっておらず、今後乳価の引上げがあっても、酪農の場合、米・畑作と違い投資負担が大きいだけに投資実行による増産は困難であるとみる。「このまま日本の酪農家数が減少していくと関連産業の維持も難しくなる。乳業メーカーがなくなると酪農が成立しない」といった縮小スパイラルが懸念される。

長期的な視点から「日本中に酪農家が存続できるような政策」が必要であり、そのためには国内での飼料生産の振興とともに「労働単価を反映した適切な生産費補償」が不可欠であるという。

6 酪農家同士の情報交流が重要

根釧地域の酪農経営は、雇用を伴い大規模化する中で、環境変化の振幅が大きくなり経営課題が複雑化しており、個別の経営対応だ



JA道東あさひ 原井組合長

けでは難しくなっている。

原井組合長はこうした環境下では「同世代の経営者が積極的に情報交換すること」が重要と考える。同JAでは「道東あさひ吾久里(あぐり)塾」を開催しており、2年間で実践的な経営管理を後継者(夫婦単位)に学んでもらう場を提供しており、この塾にはJA新人職員も参加させている。同JAは青年部、女性部・フレッシュミズ等の活動も活発である外、地元高校生の海外農業研修への支援を地域ぐるみで行っている。

海外研修については、酪農は国際競争の視点が重要なので、「世界を見ることができる経営者」になる必要があり、そのためには海外に行く意義は依然大きいとされる。特に社会や歴史との調和を重視し、都市住民も農業に対する理解があるヨーロッパ農業から学ぶ点が多いと考える。一方、アメリカのように農業を経済一辺倒でみていくと生活がなくなる恐れがあると指摘する。

最後に海外研修は「ひとことで言えば、その国の生活様式、社会制度を含めた人生経験につける」ものであり、「海外では積極的な人間にならざるをえない」ことを強調される。この言葉に海外研修の本質的な価値があるように響いた。

(むろや ありひろ)